相談支援部門の状況

特別支援教育臨床研究センター　発達臨床支援カウンセラー　田中　玲子

1. はじめに

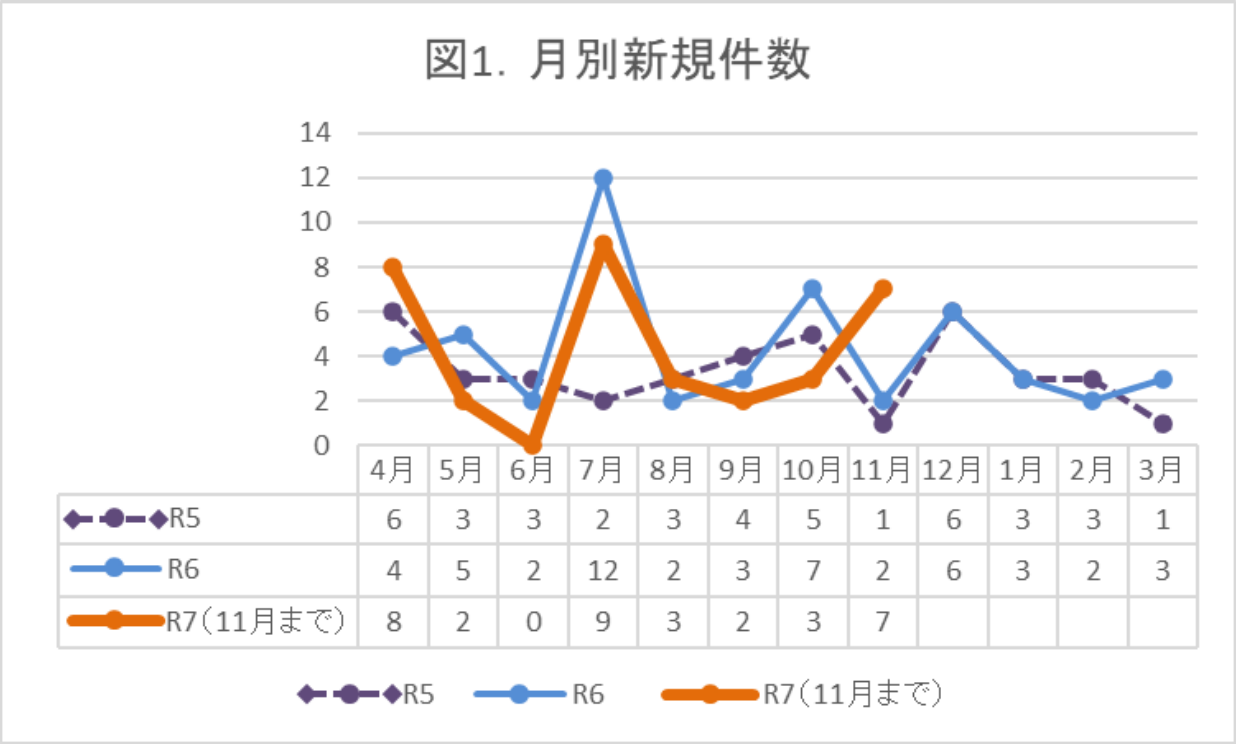
本稿では、前半で令和 5 年度から令和 7 年度 11 月までの相談支援部門の状況を報告し、後半では今年度新たに取り組んだ内容について報告する。

2. 件数

(1)月別新規件数

令和 5 年度から令和 7 年度 11 月までの月別新規件数を比較検討したものを図 1 に示す。令和 7 年度の新規件数は、月 0 件～9 件の範囲で推移し、例年とほぼ同じ水準である。

なお、新規件数には新規相談の申し込み、新たな児童生徒の行動観察、コンサルテーションや研修依頼、問い合わせを含んでいる。



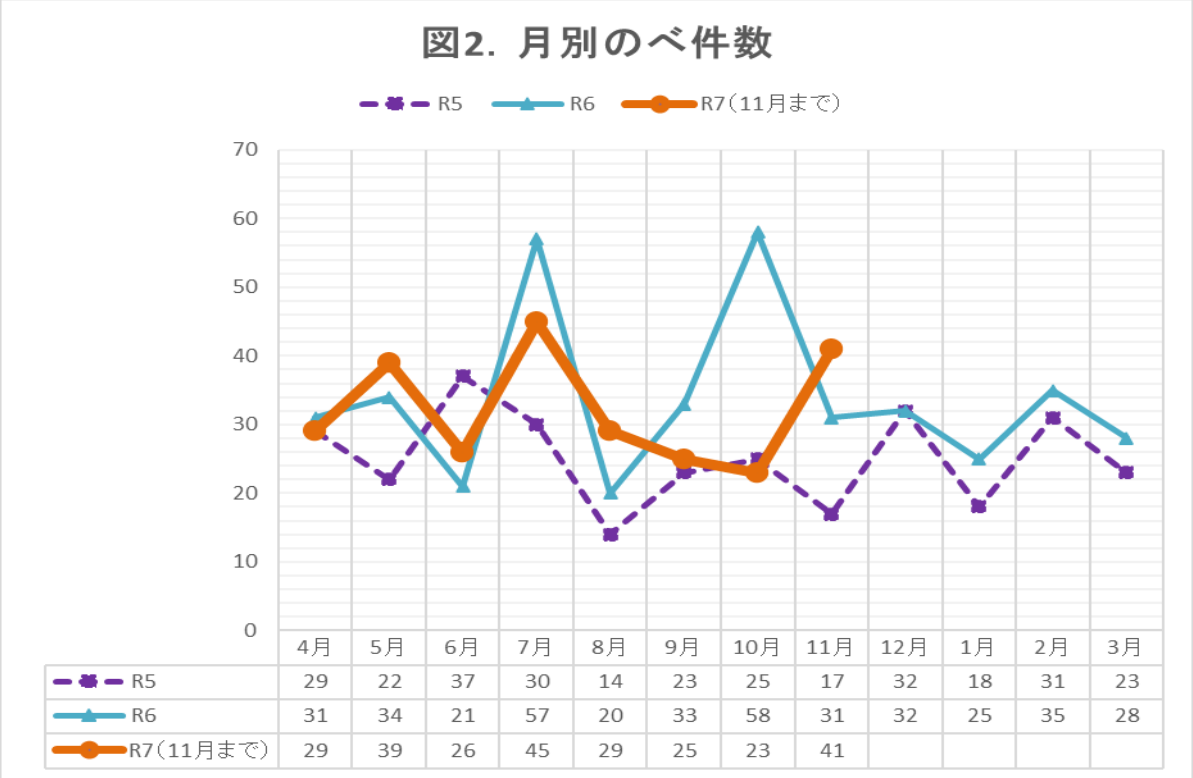
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
R5	6	3	3	2	3	4	5	1	6	3	3	1
R6	4	5	2	12	2	3	7	2	6	3	2	3
R7（11月まで）	8	2	0	9	3	2	3	7				

令和 6 年度の 7 月に件数が特に多かったのは、支援員向けセミナーに関する問い合わせが集中したためである。なお、令和 5 年度および令和 7 年度については、セミナー問い合わせへの対応を附属特別支援学校の相談支援係が担当しているため、当センターの件数には含まれていない。

今年度の件数は、4 月・7 月・11 月に山が見られ、3～4 カ月おきに増加する傾向がある。これは、新規申し込みや紹介の増加、また新たな児童の行動観察が必要となる時期が、1 学期の始めと終わり、そして 2 学期の中頃に集中したためであり、依頼が増えるタイミングが存在することがうかがえる。

(2)月別のべ件数

月別のべ件数を図 2 に示す。のべ件数では、①両親やきょうだい、教員等、複数人が同時に相談やコンサルテーションに訪れた場合、②児童生徒を複数対象に行動観察した場合は、それぞれにカウントした。研修やグループに関しては、人数に関係せずに 1 カウントとした。



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
R5	29	22	37	30	14	23	25	17	32	18	31	23
R6	31	34	21	57	20	33	58	31	32	25	35	28
R7(11月まで)	29	39	26	45	29	25	23	41				

例年、8 月は夏休み期間にあたるため件数が減少する傾向がある。今年度も同様に多くはなかったものの、9～10 月の方がより大きく減少した。その理由として、今年度は 9～10 月にかけて全 8 回のグループ活動を実施しており、週 1 回・準備と片付けを含め約 3 時間を要したことから、その時間帯に他の相談を受けられなかったことが影響したと考えられる。このため、結果として全体の件数が減ったように見えている。

また、昨年度から件数が多い月が増加している背景として、昨年度より校内巡回が始まり、複数の児童生徒を対象にした行動観察の機会が増えたことが挙げられる。特に昨年度は初めての取り組みであったため、毎月 5 名以上の児童生徒を観察し、相談支援部の先生方との連絡会で共有する体制が続いていた。

今年度は、よりきめ細やかに支援方針を共有するため、毎回の観察対象を継続支援の児童生徒 2～5 名に絞る形へと変更した。このため、昨年度に比べると件数そのものはやや落ち着いた印象となっている。また、外部でのコンサルテーションにおいても、1 回につき複数名の児童生徒を観察し助言を行うため、件数としてはその月の延べ人数が増える形で反映される。

さらに、コロナ禍が明けて以降、年間を通じたのべ件数は高い水準のまま推移している。当センターは開室時間に限りがあるため、今後相談件数が大幅に増加することは考えにくい。しかし、限られた時間の中でも、相談者にとって有益な支援を提供できるよう、今後も丁寧で質の高い対応を継続していく。

3．今年度新たに取り組んだこと

（1）子育て講座「安心感の輪」子育てプログラムの実施

①実施概要

今年度、当センターでは新たな取り組みとして、「安心感の輪」子育てプログラム（Circle of Security Parenting：COSP）を実施した。このプログラムは、アタッチメント研究の成果に基づきアメリカで開発されたもので、2024 年には NHK でも紹介されるなど注目が高まっている。全国的には徐々に広がりつつあるものの、埼玉県内ではまだ実施機関が少ないことから、当センターが試験的に実施することとした。

対象は、埼玉県在住で就学前のお子さんを育てている保護者とし、今年度は初めての実施であったため、以下の方法で参加者を募った。

1. 附属こどもの育ち応援センターで開催した「おしゃべり会」での案内
2. 支援員向けセミナーでの周知
3. 本校教職員関係者への情報提供
4. センターのホームページでの募集案内掲載

その結果、3 名の保護者が参加し、週 1 回・90 分のプログラムを全 8 回実施した。

また、プログラムでの学びが日常生活でどのように活かされているかを振り返り、必要なサポートを継続的に提供するため、5 か月後の 3 月にフォローアップ回を実施する予定である。

②事後アンケート結果

参加者からは、今回のプログラムが自分自身を深く見つめ直す貴重な機会になったという声が多く寄せられた。たとえば、「これまで子育てに関して『安心感の輪』ほど深く学ぶ機会はありませんでした。（略）自分の幼少期までじっくりと振り返り、自分の課題を見つめ直し、それを誰かと共有することは初めてでした」といった感想があった。また「これまでは感情的になりがちでしたが、どうしてあげたらよいのかが的確にわかるようになり、感情的になりにくくなりました。子育てプログラムでありながら、自分の過去も振り返れる貴重な体験でした」と述べる参加者もいた。このように、内省が深まったことを高く評価する意見が目立った。

さらに、対面で行うグループ対話の効果を実感する声も多かった。「自分が大切にしたいことがはっきり見つかってよかったです。本やネットで情報を調べることはできますが、実際に会って対話することがとても効果的で、どのトピックスも印象に残っています」「自分の友人やママ友とは違った形で、子育てについて深く話すことができました」といった感想からも、直接対話する場が大きな意味をもっていたことがうかがえる。

グループで語り合うことで、それぞれが抱える悩みや苦労のポイントの違いに気づき、他者の語りを聞くことで自分の内省がさらに深まる様子が見られた。また、年齢の大きい子どもを育てる先輩ママが後輩ママに自然にアドバイスする姿も見られ、そうした関わりを通してグループ全体に安心感が広がっていくなど、多面的な効果が認められた。

③本プログラムの意義と効果

子育て期は日々の生活に追われるため、子どもの理解を深めたい、関わり方を知りたいと思っても、本を読んだり単発講座に参加したり、身近な人に相談する程度になることが多い。また、子どもの発達に気がかりがある場合には、保健センターや医療機関、保育園・幼稚園、療育機関などが相談先となるが、定型発達の子どもを育てている保護者が、子育ての難しさそのものについて相談機関へ足を運ぶ機会は多くない。さらに、カウンセリングは「敷居が高い」と感じる保護者も少なくないのが現状である。

そのような中で、「安心感の輪」子育てプログラムは、セラピーではないものの、知識の習得にとどまらず、自分自身を内省する時間をしっかり確保できる点が特徴的である。安定したアタッチメントの形成には「感情能力」と「内省能力」の両方が重要とされる。感情能力は“今・ここ”で自分と子どもの感情を受け止め、調整する力であり、内省能力は自分の反応や子どもの行動の意味を振り返り、「なぜそうなるのか」を考えながら、より長期的な関わり方を改善していく力とされている。

本プログラムでは、講座の中で内省能力を深め、次週までの生活場面で感情能力を実践し、その経験をグループで共有するという循環を通して、両能力がより強化される構造になっている。同じメンバーと継続的に喜びや苦労を分かち合うことができ、孤独感の軽減や安心感の醸成が促されることも大きな特徴である。自身の感情調整の難しさも含めて率直に語り合える環境は、単発講座や独学では得がたい効果をもたらしている。

これまで当センターは、「特別支援教育」という名称や特別支援学校内にあるという立地から、主に発達的な課題を抱える子どもや、その支援に関わる教育現場を対象とした相談支援が中心であった。しかし今回、「安心感の輪」子育てプログラムを実施したことで、地域の子育て中の保護者が新たにセンターの存在を知り、定型発達の子どもを育てる家庭に対しても支援の門戸を広げるきっかけとなったと考えられる。

④実施にあたっての配慮と今後の取り組み

今年度は初めての取り組みであり、どの程度のニーズがあるか見通しが立たなかったため、募集案内を行う範囲を意図的に限定し、先着順で受け付けることとした。また、定員に達しなかった場合でも募集期間を延長せず、当初の締め切りのまま実施する方針とした。

さらに、参加者同士が同じコミュニティに属している場合、二重関係が生じて安全な場づくりが損なわれる可能性を懸念し、すでに形成されている特定のコミュニティに対して募集をかけることは避けた。このように、プログラム内の安心・安全を確保することを最優先に準備を進めた。

今年度は 9～10 月に実施したが、この時期は気候が比較的安定しており、保護者・子ども双方が体調を崩しにくいという利点があった。来年度以降も同時期に開催することで継続性を保ちつつ、募集期間をより長く設け、当センターが子育てプログラムを行っていることを地域に周知していきたいと考えている。これにより、地域における子育て不安の軽減や、保護者が安心して学び合える場づくりに、より一層貢献していきたい。

（2）校内支援、巡回の工夫

令和 5 年度より、小・中・高校の相談支援係の先生方と月 1 回の連絡会を実施している。定期的な会議の場を設けたことで、校内ケースの情報共有やセミナーに関する打ち合わせがより円滑に進むようになり、関係者にとって有益な協議の機会となっている。

令和 6 年度には、月 1 回の校内巡回の中で、正式なケースとしては繋がっていないものの、支援のヒントを必要としている児童生徒についても短時間の観察を行った。しかし、事前に共有される情報が概況にとどまることが多く、限られた観察時間の中では、学習・行動の背景やクラス内の人間関係まで十分に理解することが難しいという課題が明らかになった。

こうした課題を踏まえ、令和 7 年度は、支援の必要性が高いと判断される児童生徒を対象に、継続的な観察へと体制を見直した。この変更により、前回の助言が実際に取り組まれたかどうか、実施された場合にはどのような効果が見られたのか、また実施が難しかった場合にはどの点が障壁となったのかを、連絡会で共有することが可能になった。継続して様子を追うことで、児童生徒の行動面・対人面・学習参加の変化をより的確に把握でき、先生方の取り組みや工夫に対して、具体的でタイムリーなフィードバックを行うことができるようになった。

その結果、支援方針の修正が以前より迅速に行えるようになり、校内支援の質の向上に効果が見られている。

4. 今年度の相談の状況と今後の課題

今年度の相談を振り返ると、いくつかの異なる文脈で印象的な点があった。

まず、近年、重複障害の問い合わせや相談が継続的に見られている。不登校傾向が生じたり、学校の支援だけでは十分でない場面では、学校外の支援を組み合わせる必要がある。しかし、複数の障害特性に通じた相談先が見つかりにくいという課題が浮き彫りになっている。学校側でも、すべての障害特性に精通しているわけではなく、児童生徒理解や対応の方向性をめぐって教員間で見解がそろわないことがあり、家庭・学校双方が迷いや不安を抱えやすい状況が続いている。

また、相談や検査を進める中で、誰が何に困り、どのような支援を望んでいるのかを丁寧に整理することの重要性を強く感じた。保護者が支援を求めていても本人は望んでいない場合や、逆に学校が必要性を感じている一方で家庭側は様子を見たいと考えているなど、立場によって希望が一致しないことは少なくない。その際には、見立てを丁寧に共有し、検査を実施しない選択や相談継続の是非を再確認してもらうなど、支援の方向性を慎重に調整するプロセスが必要だと感じた。

加えて、相談の場を通して、「皆と同じ場で一緒に学んだ方がよい」「高校は卒業した方がよい」といった、社会的に“当たり前”とされている価値観や大人側の思い込みを見直す場面も多く経験した。こうした固定観念から離れ、子どもに合った学び方や表現方法、進路の選択肢を柔軟に広げていくことで、子どもが自分らしさを取り戻し、生き生きと変化していく様子が見られたことは非常に印象的であった。支援者側が発想の幅を広げ、その子に合った「よりよい環境づくり」を改めて考え直すことが、子どもの成長を大きく支えることを再確認した。

これら三つの気づきは、それぞれ独立した文脈から得られたものであるが、今年度の相談を通して見えてきた現場の実情と支援に求められる視点の広がりを端的に表している。今後も、専門性と中立性を大切にしながら、県内の多様なニーズに応えられる相談支援を続けていきたい。

学校コンサルテーションの実施状況

特別支援教育臨床研究センター　発達臨床支援カウンセラー　田中　玲子

1．学校コンサルテーションの現状

平成 16 年度に附属特別支援学校発達支援相談室「しいのみ」として開設されて以来、地域の教育支援の一環として、学校等の要請による「学校コンサルテーション」を実施している。

2．今年度の学校コンサルテーションの実施状況

(1) 特別支援学校

複数学年の児童を対象に、複数回の行動観察とコンサルテーションを実施した。

(2) さいたま市内中学校

保護者からの希望があり、学校の了解を得られたため、行動観察、コンサルテーションを行った。

(3) さいたま市内小学校

毎年継続しているさいたま市内の小学校で 2 回実施した。

3．コンサルテーション活動の総括と今後の展望

今年度は、市内の小中学校に加えて特別支援学校でも複数回のコンサルテーションを行ったことが特徴的であった。特別支援教育について日々学び続けている現場であっても、外部からのコンサルテーションを受けることで、日々の実践を改めて振り返り、よりよい児童生徒支援や保護者支援を模索しようとする姿勢が見られた。

こうした前向きな取り組みが進む一方で、継続的にコンサルテーションを実施し、組織としての対応力が整っている学校であっても、困り感を抱える児童の増加に伴い、現場の負担や対応の難しさが増していることも明らかとなった。背景としては、共働きの核家庭の増加により家庭での支援時間が確保しにくい状況や、保護者の不安感の強さ等から児童生徒の特性理解および支援方針の共有に時間を要するケースが増加していることが挙げられる。

そのような環境下においても、コンサルテーションの場では学校側から子どもに対してできる支援策のアイディアが次々と提案され、実行可能なものをスピーディーに取り入れようとする姿勢が見られた。これは学校現場が持つ専門性と実行力の高さを改めて実感する場面でもあった。一方で、支援ニーズの複雑化・多様化が進む中、教職員が過度な負担を抱え、疲弊するリスクも無視できない。

そのため、今後も継続的なコンサルテーションを通じて学校現場と連携し、支援体制の強化や教職員のメンタルヘルスへの配慮に寄与していくことが重要であると考える。

研修会等への講師派遣状況

特別支援教育臨床研究センター　発達臨床支援カウンセラー　田中　玲子

1．講師派遣状況

時期	主催	開催方法	講演対象	主な内容	講師
6月25日	埼玉大学教育学部付属こどもの育ち応援センター	現地訪問	保護者	アタッチメントに関する子育ておしゃべり会	センタースタッフ
8月22日	小学校（通常学級）	現地訪問	教職員	発達障害理解に関する研修会	センタースタッフ
9月9日	高校（定時制）	現地訪問	教職員	発達障害理解に関する研修会	センタースタッフ
12月2日	小学校（特別支援学級）	現地訪問	保護者	アタッチメントに関する研修会	センタースタッフ

2．実施状況

昨年度は合計 4 回の講師派遣を行い、今年度も 4 回実施した。

(1) 埼玉大学教育学部附属こどもの育ち応援センター　子育ておしゃべり会

0～3 歳の保護者を対象に、アタッチメントをテーマとした子育ておしゃべり会を開催した。はじめにアイスブレイクを行い、保護者同士が話しやすい雰囲気をつくった。その後、一人ひとりに「子育てで知りたいこと」を一言ずつ紹介していただき、自己紹介を兼ねて参加者同士の距離を縮めた。続いて、アタッチメントに関する簡単なレクチャーを実施し、後半にはレクチャーを受けて感じたことや日頃の子育てについて話し合う交流の時間を設けた。

今回の会では、アタッチメントが示す安心感・安全感を、保護者自身が「安心して話せる」「支えられていると感じられる」体験として感じられることを大切にした。日常の子育てを共有しながら、互いに力を得られる場となるよう、参加者同士のつながりを育む雰囲気づくりを意識して進行した。

(2) 小学校（通常学級）の教職員対象の研修

学校のニーズを事前にヒアリングした上で、前半では応用行動分析（ABA）の基本的な考え方を、後半ではアタッチメント理論の視点を紹介した。いずれの内容も、具体的な「How To」を伝えるのではなく、子どもを理解するための見方や捉え方を共有することを重視した。これにより、特定の場面や子どもに限定されず、幅広い状況に応用できる知識として役立てられると考えたためである。

また、ABA が「望ましい行動の形成」を目的に環境調整や強化を重視するのに対し、アタッチメント理論は「行動をコミュニケーションの表れ」として捉え、関係性や安心感に焦点を当てる。この二つの視点は一見相反して見えることもあるが、どちらか一方に偏るのではなく、双方の考え方を理解しておくことで、子どもの行動をより多面的に捉えることが可

能となる。そのため、今回の研修では両方のアプローチを紹介し、学校現場での実践に生かしてもらうことを目指した。

(3) 定時制高校の教職員対象の研修

高校卒業後は、生徒によっては就職を選択する可能性も高く、事前アンケートでは卒業後の進路選択を見据えた質問が数多く寄せられた。特に、高校が“社会に出る前の最後の教育機会”となることを踏まえると、本人および保護者が、自らの特性や強み、そして支援が必要な点を正確に理解し、その上で納得感をもって進路を選択できるよう支援することが、本研修の大きなテーマとなった。

研修では、働き続けるための基礎的な力を段階的に整理した「職業準備性ピラミッド」を紹介した。このモデルは、最下層にある健康管理を土台とし、日常生活管理、対人スキル、基本的労働習慣、そして最上層の職業適性という構造で示されている。本人や保護者は、どうしても最上層の「職業適性」に注目しがちであるが、実際には、基礎的な生活習慣や対人スキルが十分に育っていなければ、働き続けることは難しい。そのため、ピラミッドのどの段階ができているか、またどこに伸びしろがあるのかを客観的に振り返ることが、進路選択の第一歩となることを強調した。

さらに高校現場では、先生方の善意や環境調整によって、生徒が日常的に“合理的配慮に相当する支援”を受けているケースが少なくない。これらの支援が本人や保護者にとって“当たり前”として認識されている場合、進学先や就職先でも同様の配慮が受けられると誤って期待してしまい、結果としてミスマッチや困難を招く可能性がある。

そのため、現在どのような配慮を受けているのかを意識化し、「自分でできること」と「人にお願いしたいこと」を整理したうえで、必要な合理的配慮を自ら伝えられる力を育むことが重要である点も併せて伝えた。進路の選択と適応を支えるために、この“自己理解と必要な配慮を自ら求める力”は不可欠であり、高校段階だからこそ育てていきたい視点である。

(4) 小学校（特別支援学級）の保護者向け研修

学校のニーズを事前にヒアリングした上で、「子どもの気持ちが安定する家庭における親と子の関わり方」をテーマに、アタッチメント理論に基づく研修を実施した。特別支援学級の保護者を対象としていたため、まずはアタッチメントの基本的な考え方を紹介し、子どもが安心して探索行動を広げられるようにするための親子の関わり方について説明した。

続いて、特別な教育的ニーズをもつ子どもへの支援についても具体的に取り上げた。定型発達の子どもへの一般的な関わりに加えて、集中しやすい環境の調整、必要に応じた繰り返しの提示、具体的で短い指示、見通しをもって挑戦できるよう支えることなど、個々の特性に合わせた支援の工夫が重要である点を強調した。

さらに、安心につながる寄り添い方は子どもによって異なるため、「わが子にとってどのような関わりが安心につながるのか」を保護者自身が捉えることの大切さについても触れた。特に、見通しの立たない状況に不安を抱きやすい子どもや、感覚過敏・感覚鈍麻など固有の感覚特性をもつ子どもに対しては、環境調整、情報の整理、状況の分かりやすい説明な

ど、安心を支えるための具体的な工夫例を紹介した。

また、人は皆「繋がりたい」という欲求があり、子どもが安心できることと同じように、親自身が安心できる繋がりを持つことも重要であることを強調した。親子の関わりにおいて求められるのは「完璧さ」ではなく、程よい関わりで、ミスやずれが起きても気づいて修復できる関係性であることを伝えた。

研修後には、「人とのつながりたい気持ちは誰にでもあり、大人自身が安心感の輪を巡ることが大切だと感じた」、「大切なのは“程よい関わり”であり、ずれが起きた際に修復できることが必要だと実感した」、「支援級か通常級か迷っていたが、何より子どもが安心できることが大切だと気づき、今後の進路を考えるきっかけになった」などの感想が寄せられ、アタッチメントの視点が保護者にとって実践的かつ有用な気づきにつながったことがうかがえた。

3. 今年度の実施の総括

研修では、依頼元のニーズに応じて、特別支援・教育相談・福祉など幅広い分野を扱ってきた。今年度も例年同様、小学校教職員向けの研修を実施したが、それに加えて、附属こどもの育ち応援センターの 0～3 歳の保護者向け研修、特別支援学級の保護者向け研修、定時制高校の教職員向け研修など、より幅広い年齢層および対象者からの依頼が寄せられたことが特徴であった。

研修内容は対象者によって大きく異なる。保護者向けの研修では、専門用語の使用をできる限り控え、日常的に理解しやすい言葉に置き換えながら説明することを意識した。一方で、教職員向けの研修では、各学校のニーズを事前に丁寧にヒアリングし、現場が抱える具体的な課題に応じた内容を提供するよう努めた。

各学校では、それぞれの年齢の児童生徒と向き合うことになるが、発達は連続性をもつプロセスであり、これまでどのような環境で育ち、どのような関係性を築き、どのような経験を積んできたかという背景を理解した上で関わることの意義は大きい。また、今後進む先ではどのような力が求められるのか、どのような支援が得られるのかを見通したうえで、現時点で取り組むべき支援が何かを考える必要がある。

今年度、幅広い層に対して研修を実施したことにより、センターとしては各発達段階で生じる悩みや疑問を知ることができ、子どもと保護者を長期的な視点で捉えて支援していくことの重要性を改めて実感する機会となった。

4. 今後に向けて

今年度は、これまで以上に幅広い層から研修依頼が寄せられた。同じ内容を扱う場合でも、対象に応じて動画の活用や説明の深さを調整するなど、多様な工夫が求められた。参加者のモチベーションや基礎知識、興味関心は大きく異なるため、事前にニーズを把握していても、どこに焦点を当てて伝えるか迷う場面は少なくなかった。

近年は、学ぼうと思えば容易に情報へアクセスでき、個人が自分のペースで学びを深められる時代である。その中で、組織内で研修を実施する意義は、共通言語を育むこと、そして学びを共有して現場で使える知識に転換することにあると考える。さらに、研修は個人の成長にと

どまらず、視野を広げ、多様性を理解し、関係性を深める場として機能し、組織全体の成長につながることが期待されている。

共通言語を持つためには、知識の提供が不可欠である。一方で、学んだ内容を現場で活用可能な形にするには、心理的安全性が確保された組織風土と、学びを更新し続けられる土壌づくりが欠かせない。たとえば、

・分からないことや失敗を隠さずに言葉にできる雰囲気
・疑問や反対意見が歓迎される風土
・他者との比較ではなく、過去の自分との比較で成長を捉える姿勢
・多様な個性が自分らしさを保ったまま支え合える関係性

といった環境である。これらはいずれも一朝一夕には築けず、日々の積み重ねによって形成される。単発の研修だけで十分に育むことは難しいものの、外部講師による研修は、内部では生まれにくい新たな視点や切り口を提供できる点で意義が大きいと考える。

今後も、より実践的で充実した研修を提供できるよう、最新の知見に継続的に触れ、資料作成と研修の質の向上に努めていく。その積み重ねが、学び合いを基盤とする組織づくりに寄与すると考える。

「令和７年度　保護者学習プログラム」を通しての学び

埼玉大学教育学部附属特別支援学校
教諭　柳瀬　貴之

１，はじめに

本校の「保護者学習プログラム」も今年で４年目の開催となった。今年度は、コロナ禍も明け、初の全講演対面のみの講演とした。対面での講座の意義としては、「講師との積極的なやり取り」「保護者間のつながり」「体験的な学び」に重点を置いた。昨年同様「子どもたちの学びを止（と）めないこと」そして、それを支える保護者についても子どもたちの成長に合わせて学べるよう、様々な講師からの情報提供や保護者同士で情報を共有する場を作ることを目的に実施をした。新しい試みとしては、近隣の小中学校の保護者が参加できる公開講座の開催も行った。開催回数と運営に関しては昨年度までの反省を受け、回数は 3 回とし、保護者のニーズの高い進路についての内容は進路指導主事と連携を取りながら進めた。本稿は、今年度全３回開催について整理したものである。

２，プログラムへの参加方法

今年度は、全３回の構成で開催している。例年通り、保護者は興味のあるテーマに参加をする自由参加方式である。今年度は、昨年度に引き続き、会場開催のみの開催とした。
今年度は、昨年度同様会場参加のみとした。３回の開催で、66 名の申し込みがあった。昨年度よりも多少参加人数は減少したが事前申し込みがなかったがこれまでの平均と比較しても概ね同様の数字となった。これまでの参加者の人数と平均を表 1 に示す。

開催年度	開催回数	参加人数			1 回あたりの平均参加人数
		会場	オンライン	総計	
令和4年度	7 回	94	31	125	17.8
令和5年度	5 回	74	19	93	18.6
令和6年度	3回	74		74	24.6
令和 7 年度	3 回	66		66	22.0

表 1　各年度の参加人数及び参加者の平均人数

３，プログラムの内容

昨年度に引き続き、今年度も３回の担当を「外部講師による卒業後・進路系」「本校教職員による講座」「埼玉大学・附属関係者」とした。内容は、過去の保護者アンケートや担当者が必要だと思う内容を取り入れて行った。各回の予定及び講師を表 2 示す。

開催日	内　　容	講　　師
9月 19（木）	「お伝えしたい大切な年金の話」	大宮年金事務所　お客様相談室　蜂須　健司　氏
10 月 24（木）	「子どもの行動を考える ～応用行動分析の視点から～」	本校教諭　柳瀬　貴之
1月 30（木）	「遊びと学びの関係から見えるこれからの学びについて～子どもの言語習得のプロセスを中心に」	埼玉大学教育学部附属中学校 校長　関口　睦　氏

表 2　今年度の各回の予定及び講師（参加案内資料抜粋）

４，成果と課題

会場参加型のみでの開催としたが、例年通りの参加人数で開催することができた。保護者アンケートの中で開催回数についての項目を入れたが 3 回が妥当という意見が大勢を占めていた。保護者の側からしてみても 3 回という回数は参加しやすいものであったと考えられる。今後も長期に開催していくことを考えると妥当な回数であったと考える。近隣の学校から参加された保護者からの満足度（アンケート結果）は非常に高かった。進路や年金、福祉サービス等についての関心が高いためそのような講座開催時には今後も発信していくとよい。今年度は講義型のみでの開催となった。来年度以降は保護者自身が参加しコミュニケーションを図ることができるものも検討していきたい。

以下に参加者の感想を紹介しながら総括をしていく。

（1）第 1 回

第 1 回は、近隣の学校の保護者も参加できる公開講座で行った。「お伝えしたい大切な年金の話」というテーマであったため、どの学部の保護者も関心が高かった。①公的年金制度について　②皆さんの今後の人生と年金制度についてと大きく 2 本の柱での講演会となった。

事前に講演会についてのアンケートを実施し、保護者のニーズを把握し講義の中でその質問にお答えいただきながら実施した。このアンケート結果から卒業後の生活についての関心が高い保護者が多いことがうかがえた。事後のアンケートは実施することができなかったが、講演中の様子を見ると熱心に話に耳を傾けている様子が多くみられた。以下に保護者からの事前質問を示す。

・年金申請するときの用紙の見本をみたいです
・とても興味深いテーマをありがとうございます。年金申請時に保護者が補足資料として作成添付できる資料の有無や内容、量、ポイントについて知っておきたいです。どうぞよろしくお願いいたします。
・障害基礎年金以外に入れる年金はありますか。（例えば ideco のような）・障害を持ってい

るかたの多くは障害基礎年金(＋賃金等もありますが)だけで生活できているのでしょうか。
・療育手帳 C 判定の軽度知的障害者の年金受給について教えて下さい。
年金額の見直しは、どのタイミングで行われるのでしょうか。
・今のところ、障害者年金について仕組みをあまり理解できていませんので、障害の等級別からみえてくることを教わりたいです。
・受給するために今からしておいた方が良いことがあれば教えてください

（２）第２回

第２回は、子どもたちの行動の意味（機能）を考え、行動問題そのものに着目するだけでなく、支援する側の行動や環境に目を向けることで子どもたちの行動問題を改善していくために「子どもの行動を考える～応用行動分析学の視点から～」というテーマでおこなった。参加者が考えながら参加できるよう、事例を加えながら実施をした。開催後の保護者からの感想は以下のとおりである。

・すごく面白かったです。こどもの行動には意味があり、一つ一つ順番に丁寧に考えていけば対応の仕方のヒントが得られる気がしました。ありがとうございました
自分の行動が子供に影響を与えていることを念頭に入れて子供と関わっていきたいと思いました。
・変わるべきは、大人 と改めて思いました
・本日はありがとうございました。本など読んで来て、実践しているつもりではありましたが、困った行動は減らなかったり、新たに増えたり。悩みながら色々試しているところです。とても本日の続きの続き、実践応用編が聞きたいです。またの機会を楽しみにしています。
・基礎を再確認させて頂けたよい機会でした。ありがとうございました。
・「これは私の話なんですが」と先生ご自身のエピソードを交えながら、聴き手側が傷つかないよう、且つ受け取りやすいような話し方をされていらっしゃったのがとても印象的でした　息子ははや高等部となりましたが青年期ならではの悩みもあり、親子で壁にぶつかりながらの日々を送っている真っ最中でしたので自分自身の行動を振り返る良いきっかけとなりましたご準備もお一人で大変だったことと思います、重ねてありがとうございました
・事例をだして頂くことで理解しやすかったです。適切な行動を導くために親の行動や態度表現も気をつける大切さも改めて感じました。
・私たち母親も今回の内容は良かったと思います。しかし、今後、オンラインなどの利用でお父さん方にもぜひ学んで貰いた内容と思いました。特に今回は、男性教諭＝父親の経験談であったのでお父さん方も自分自身の事に置き換えやすいと思いました。ぜひ、検討お願いします。(高３父親にも機会をお願いします)
・小さい頃の療育が ABA を取り入れていて、誤学習しないようにその場での称賛が大事みたいな内容で理解したつもりでした。今回の ABC 分析は、資料を読んで理解したつもりになるよりも、例題の実践のような形式でとてもよくわかりました。分析のシートの意味や目的がよくわかりました。貴重な時間をありがとうございました。
・学校で開催してくださる学習プログラムに参加すると、私は日々気になっていることへの頭の中の整理だったり、忙しさから一旦リセットされる機会になっています。“子供の行動には意

味がある”を考えながら、見守っていきたいと思います。ありがとうございました。
・やはり 子供の行動や言動には ひとつひとつ意味があるんだなぁ…と つくづく思いました。なかなか余裕がこちらにない時は 子供と向き合う事が難しいのですが、なるべく向き合えるようになれたならと思いました

参加された保護者が子どもたちの行動にはこんな意味があるのかもしれない、自分の支援や環境が影響を与えていたのかもしれないといった観点を広げたり、自分の行動を振り返ったりといったことにつながり今後の家庭等での支援や関わりへの一助になったことがうかがえた。

（３）第３回

第３回は、「遊びと学びの関係から見えるこれからの学びについて～子どもの言語習得のプロセスを中心に～」というテーマでご講演をいただいた。開催後の保護者からの感想は以下のとおりである。

・具体的なお話から、言語を経験から獲得していくという言葉が印象に残りました。幼少期を思い出し、その通りだなと実感しました。遊びや余白の大事さを改めて考える時間となりました。附属中学校は勉強ばかりのイメージでしたが、体育祭入場やファッションショーの動画を見せていただき、創造性や子供達の自主性も大切にして実行されていることに驚き、感動しました。素敵な時間となりました。ありがとうございました。
・教わることは……失なうこと　の意味が、わかりました　生きていくなかで、大事な気づきでした
・最近不登校のこどもが増えているニュースを見るたび、切ない気持ちになります。関口先生が見せてくださった附属中学校の動画では、生徒たちが思いっきり楽しんでいる様子が伝わってきたので安心し、涙が出そうでした。学校が、決められたことを教える場、教わる場だけになってほしくないなと、得意なことを生かし合いながら楽しめる場であってほしいなと心から思いました。
・とても聞きやすくて面白いお話しでした。ぜひスライドの資料がいただきたいです。講師の先生に質問ではなく要望ですが、付属中の在校生さん達にうちの子のような障害児のことをもっと知ってほしいです。付属中ではないですがよく近隣の中学生から笑われたりからかわれたり辛辣な視線をあびています。こういう子も世の中にいることを授業の中に取り入れてほしいです。
・貴重なお話ありがとうございました。学びとは何か、改めて考える機会になりました。我が子にも沢山寄り道をしながら心が豊かになる経験をしてほしいと思いました。
・自分は受験の為に詰め込んだ知識は今ほとんど役立っていません。講師の先生の学習に対する視点は新鮮でした。
・今回のテーマで、幼い妹の発語のヒントになればと思い申し込みました。言葉に繋げようと「教えこませている」現状に気づかせてもらいました。ありがとうございました。

特別支援教育を専門としている先生とは別の視点からの内容であったため新鮮な学びがあっ

たことが見受けられた。様々な視点からの話をうかがうことの大切さを再認識することができた学習会であった。

（５）今後に向けて

今年度は開催回数を昨年度同様に 3 回で実施した。昨年度のアンケート結果を活かした内容を考えたり、講演内容に関する保護者からの事前質問を集約したりすることで、どの回も参加者が例年と変わることなく集まり、参加者からも満足できたという内容の感想をいただくことができた。保護者同士の情報交換や学び合いについては実施することができなかったため来年度はそのようなことも意識的に取り入れた内容を考えていく

は、理解を深める効果が昨年度同様高かったと感じる。また、運営側としても、子どもたちの教育活動に影響なく、保護者学習プログラムとの両立ができる回数だったと考える。保護者からのアンケートでは「教員の専門性に関する内容」「思春期への対応」「性教育」「兄妹児との関り」「特性に応じた支援方法」「卒業後の生活」「福祉サービスについて」といった、成長とともに出てくる課題への対応方についての内容の要望が高い。

来年度以降も進路指導主事と連携をとりながら、「進路・卒業後」についての学習会の充実と、「性教育」については、養護教諭や保健給食部との連携をとりながら内容を決めていけるとよいと考える。

令和７年度通常学級の特別支援教育支援員向けセミナー実施報告
～ワンランクアップ 発達障害の子どもの理解と支援～

埼玉大学教育学部附属特別支援学校　教諭　柳瀬　貴之

１．支援員向けセミナーの意義と現状

文部科学省の令和４年の調査では、「知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示す」とされた児童生徒は、小学校・中学校：8.8%、高等学校：2.2%在籍していると推計されている。「特別支援教育支援員の支援の対象となっているか（支援員一人が複数の児童生徒を支援している場合も含む)」に対する回答は、小・中学校では、対象となっている児童生徒が 13.8%、現在はなっていないが過去なっていた児童生徒が 1.9%。高等学校では、対象になっている生徒が 8.8%、現在はなっていないが過去なっていた生徒が 1.3%という結果が示された。このような結果から多くの学校の通常の学級において、支援を必要としている児童生徒が在籍していることが考えられる。そのため、校内支援体制の構築や、分かりやすい授業の工夫、個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成と活用とともに、特別支援教育支援員の存在はこれらの児童生徒の支援にとって大変重要な存在となっている。

埼玉県の各市町村では、特別支援教育支援員が各校に配置され、多くの支援員の方々が児童生徒の支援にあたっている。しかし、支援員向けの研修は開催される機会が少なく、支援員が専門的な知識を得る機会が少ない。また、支援員の方々が悩みを相談したり、支援員同士で情報共有したりする場や機会についても少ないと考える。

そのため、当センターでは支援員の方々が障害等に関する講演を聞くことにより知識を得たり、互いに情報共有をしたりする機会として、平成 22 年度から特別支援教育支援員向けセミナーを毎年開催している。例年多数の申し込みがあり、コロナ禍においてはオンラインでの開催を続けてきた。

２．令和７年度セミナーの概要

コロナ禍や本校改修工事のため、昨年度まではしばらくオンライン開催が続いていたが、昨年度より対面でセミナーを開催した。以前参加された支援員の方々からのご意見を踏まえ、今年度は午前中のみの開催とした。概要は以下の通りである。

１　趣　旨　通常の学級で困難を抱える児童生徒に対する支援方法についての専門的で具体的な知識等を学ぶ機会とする。
２　対象者　通常の学級で困難を抱えている児童生徒の支援に携わる支援員、補助員
３　日　時　令和７年８月１日（金）9：30～12：00（受付 9：00～9：30）
４　会　場　埼玉大学教育学部附属特別支援学校体育館（例年附属特別支援教育臨床研究センターでの開催だが、今年度希望者が多数となったため会場を変更した）
５　受講料　無料
６　申し込み期間　７月２日（水）～7 月２３日（水）まで　添付の QR コードから申し込み

＜日程、内容＞

9：00～ 9：25	受付
9：30～ 9：35	開講式　センター長挨拶、講師紹介
9：35～10：50	講演「応用行動分析学に基づく行動支援」 講師　東京学芸大学　講師　加藤慎吾　氏
10：50～11：00	休憩
11：00～11：50	協議　事例ケース研究　事例をもとに、支援方法について班ごとに検討する

11：50～11：55	休憩・閉講式準備
11：55～12：00	閉講式

３．事前アンケート結果

（１）勤務している学校種

事前アンケートで収集した、所属校種について図 1 に示す。

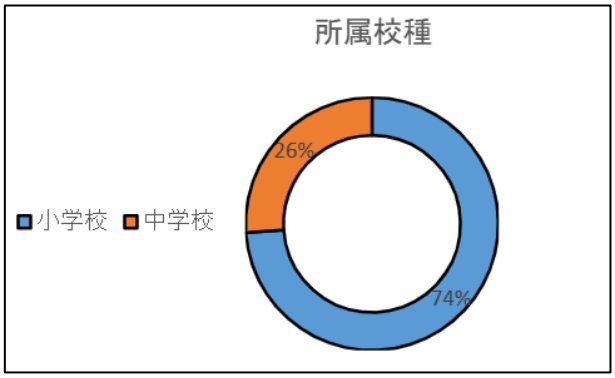


図 1　所属校種

（２）支援において困っていること

事前アンケートで収集した、支援において困っていることについての結果を図 2 に示す

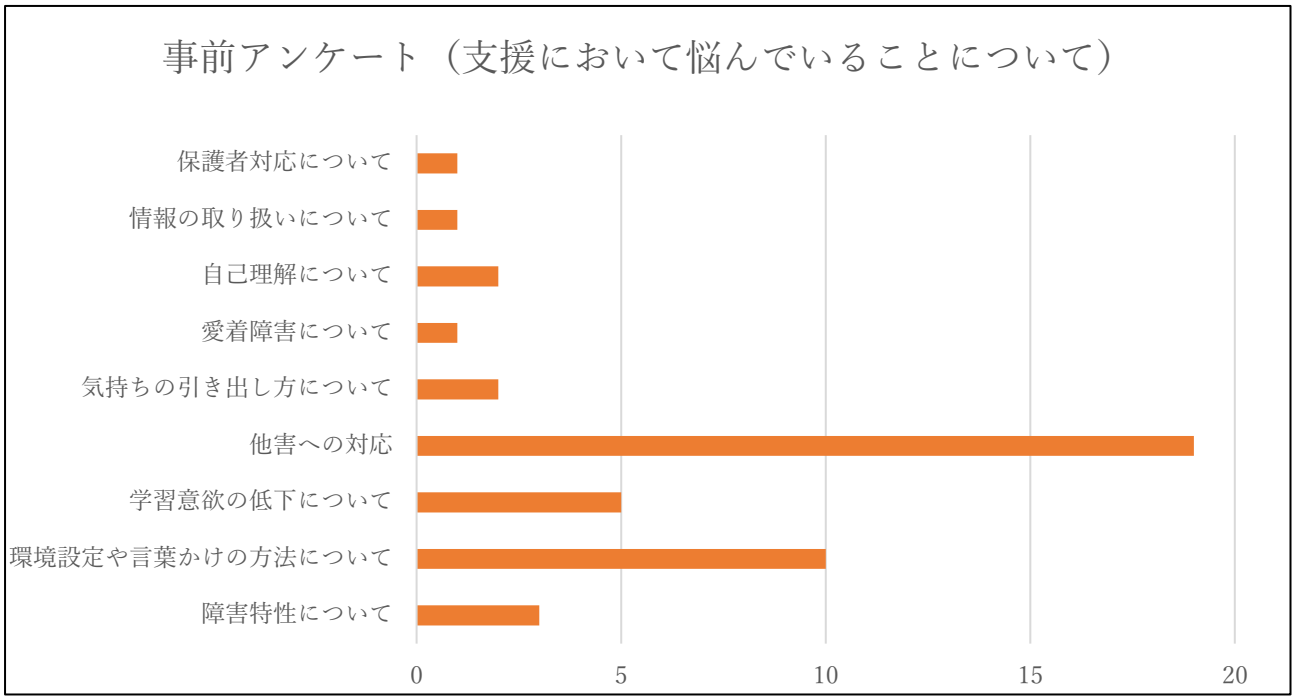


図 2　事前アンケート結果

参加者については、職名は様々だが小学校、中学校において特別支援教育支援員にあたる

方々であった。事前アンケートの結果から、児童生徒の他害等の行動問題について、あるいは環境設定や適切な言葉かけについて悩まれている方々が多いことが明らかになった。このことを踏まえ、講演内容やグループ協議の内容を講師の先生と相談して決定した。

講義は、

１．応用行動分析学に基づく行動支援の基本的な枠組み

２．行動問題支援の基本的な考え方

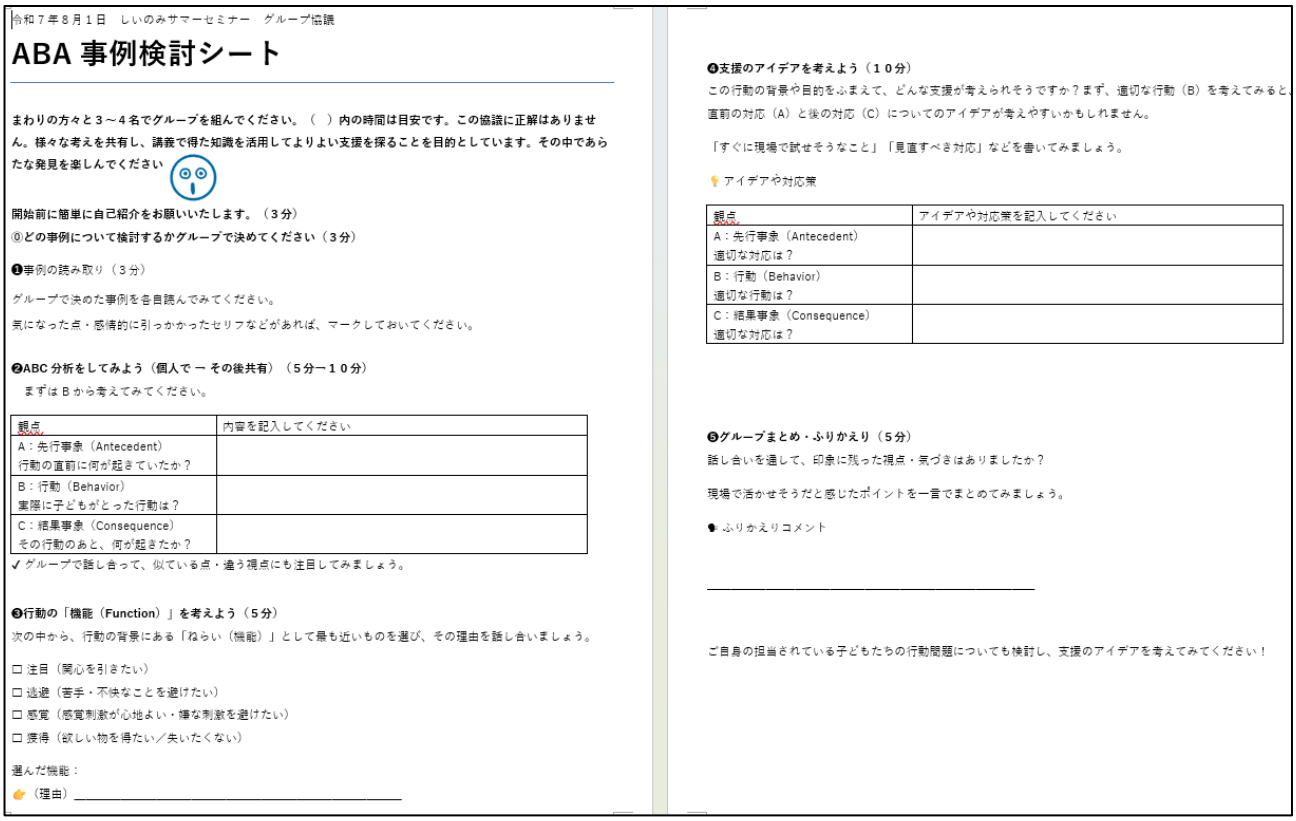
３．支援員の先生方に期待する行動支援について

の３つについての内容でお話しいただいた。

４．グループ協議　事例ケース研究の概要

講義で学んだ内容をもとに ABA の考え方を用いて行動問題の把握、事前事後の出来事の整理、適切な対応等について事例をもとに検討した。グループは指定せず近くに座った方同士で３～4 人で組んでいただくように促した。考え方はワークシートを提示しそれに沿って考えることができるようにした。事例は各参加者同士で提供しあっていただくことも考えたが、協議時間の制限もあるため事前にいただいたアンケートをもとに担当の方で 400 字程度の文章で書かれた事例を４つ用意しその中から１つ選択して協議を行っていただいた。ワークシートを図３、事例を図４に示す。

協議中は本校教員もファシリテーターとして参加し協議のサポートを行った。



令和７年８月１日　しいのみサマーセミナー　グループ協議

ABA 事例検討シート

まわりの方々と３～４名でグループを組んでください。（　）内の時間は目安です。この協議に正解はありません。様々な考えを共有し、講義で得た知識を活用してよりよい支援を探ることを目的としています。その中であらたな発見を楽しんでください

開始前に簡単に自己紹介をお願いいたします。（３分）

⓪どの事例について検討するかグループで決めてください（３分）

❶事例の読み取り（３分）

グループで決めた事例を各自読んでみてください。

気になった点・感情的に引っかかったセリフなどがあれば、マークしておいてください。

❷ABC 分析をしてみよう（個人で ー その後共有）（５分ー１０分）

まずは B から考えてみてください。

観点	内容を記入してください
A：先行事象（Antecedent） 行動の直前に何が起きていたか？	
B：行動（Behavior） 実際に子どもがとった行動は？	
C：結果事象（Consequence） その行動のあと、何が起きたか？	

✓ グループで話し合って、似ている点・違う視点にも注目してみましょう。

❸行動の「機能（Function）」を考えよう（５分）

次の中から、行動の背景にある「ねらい（機能）」として最も近いものを選び、その理由を話し合いましょう。

☐ 注目（関心を引きたい）

☐ 逃避（苦手・不快なことを避けたい）

☐ 感覚（感覚刺激が心地よい・嫌な刺激を避けたい）

☐ 獲得（欲しい物を得たい／失いたくない）

選んだ機能：

👉（理由）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

❹支援のアイデアを考えよう（１０分）

この行動の背景や目的をふまえて、どんな支援が考えられそうですか？まず、適切な行動（B）を考えてみると、直前の対応（A）と後の対応（C）についてのアイデアが考えやすいかもしれません。

「すぐに現場で試せそうなこと」「見直すべき対応」などを書いてみましょう。

💡 アイデアや対応策

観点	アイデアや対応策を記入してください
A：先行事象（Antecedent） 適切な対応は？	
B：行動（Behavior） 適切な行動は？	
C：結果事象（Consequence） 適切な対応は？	

❺グループまとめ・ふりかえり（５分）

話し合いを通して、印象に残った視点・気づきはありましたか？

現場で活かせそうだと感じたポイントを一言でまとめてみましょう。

✎ ふりかえりコメント

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

ご自身の担当されている子どもたちの行動問題についても検討し、支援のアイデアを考えてみてください！

図３　事例検討シート

1　授業中に私語が止められない児童

小学５年生のこうた君（仮名）は、授業中に周りの友だちに話しかけることが多く、担任の先生から何度も注意を受けています。特に、好きな社会科や図工の授業中に話しかける頻度が高く、「ねえ、これ見て！」や「これってさ～」などと、授業に関係のない話題をふってしまうこともあります。

ある日の社会の授業中、先生が黒板に地図を映し出して説明をしていたとき、こうた君は隣の友だちに「昨日のゲームさ～」と話しかけ始めました。先生が「こうた君、今はお話しする時間じゃないよ」と声をかけると、「はーい」と返事をしたものの、数分後にはまた別の子に話しかけてしまいました。

授業後に先生が個別に声をかけると、こうた君は「だって〇〇くんが笑ったから」「ちょっとだけならいいかと思って」と話していました。注意された後も、周りの友だちにクスクス笑われることがあり、こうた君も得意げな表情を見せていたそうです。

2　授業に行きたがらない児童

小学４年生のりなさん（仮名）は、最近、３時間目の理科の時間になると保健室に行きたがるようになっています。朝の会や１・２時間目の国語や算数の授業には問題なく参加していますが、２時間目が終わって休み時間になると、表情が暗り始め、トイレに行ったり、廊下で立ち止まったりすることが増えました。

ある日、チャイムが鳴り、担任の先生が「もうすぐ３時間目が始まるよ。教室に戻って席についてね」と声をかけると、りなさんはうつむいたまま動こうとせず、「お腹が痛い。保健室に行っていい？」と小さな声で言いました。先生が「ちょっと休みたい気分なんだね。今日は無理せず保健室に行こうか」と応じると、りなさんは静かに頷き、保健室へ向かいました。

保健室では落ち着いた様子で過ごし、養護教諭と会話をしながらぬり絵をして過ごしました。授業の後半に戻ることはなく、そのまま４時間目の社会から教室に戻りました。理科の時間には、グループで実験や発表をする活動が多く、りなさんはそれが「苦手」と以前に話していたことがあります。

3　突然の癇癪や暴力を示す児童

小学３年生のたくや君（仮名）は、普段は比較的穏やかに過ごしていますが、思い通りにいかないことがあると、突然大声を出したり、机を叩いたり、近くの子を叩くなどの問題行動を起こすことがあります。

ある日の図工の時間、クラスでは「自分だけのロボットを作ろう」というテーマで製作をしていました。たくや君は早めに作業を終えて「先生、できた！」と得意そうに声をかけました。先生は「いいね！でもあと 10 分あるから、もっと工夫できるところがないか見てごらん」と言いました。

その言葉を聞いたたくや君は急に不機嫌な表情になり、「もうやらない！」と叫びながら机を叩き、隣の子の作品を押し倒してしまいました。驚いた他の子が一斉に距離を取ると、たくや君はさらに怒ったように「見るな！」と叫びました。

先生がすぐに近づいて「落ち着いてから話そう。いったん廊下に出ようか」と声をかけると、たくや君は泣きながら廊下に出ていきました。数分後には落ち着いた様子で戻ってきましたが、その日はもう図工の続きをすることはありませんでした。

4　やりたくないことをやらない生徒

中学１年生のあかりさん（仮名）は、授業中にプリントやワークシートが配られても、ペンを持たずにじっと座っていることがあります。特に苦手意識のある数学や英語の時間には、「わからないから無理」「あとでやる」とつぶやいたり、ぼんやり窓の外を見たりして手を動かしません。

ある日、英語の授業で新しい文法を学ぶ時間に、あかりさんは机に突っ伏して動こうとしませんでした。先生が「大丈夫？手伝うよ」と声をかけても、「無理」「知らん」とつぶやいて顔を伏せたまま。先生はしばらく様子を見た後、「じゃあ、少し休んでていいよ。終わったら見せてね」と言って離れました。

その後もあかりさんは活動に参加せず、結局その時間のプリントは白紙のままでした。授業後、友だちと話すときは普通に笑顔で過ごしていました。

図４　グループ協議で使用した事例

５．事後アンケート結果

（１）講義内容に関するもの

講義内容に関する事後アンケートの結果を図５に示す

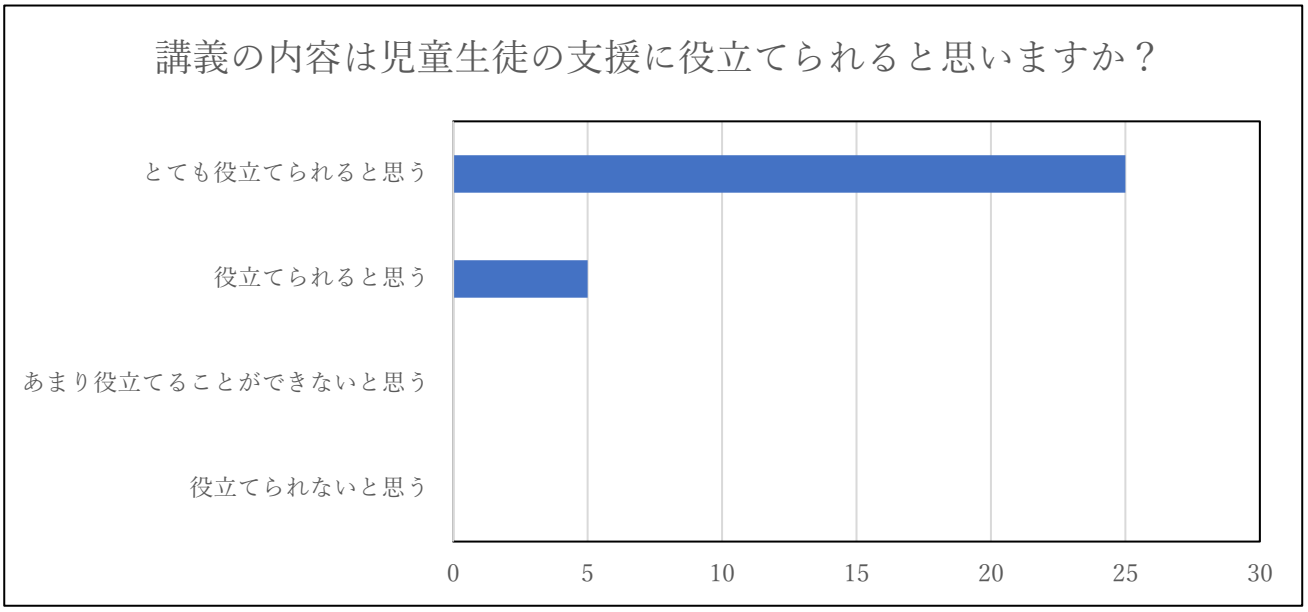


図５　講義内容に関する事後アンケートの結果

アンケートを提出いただいた参加者全員が「とても役立てられると思う」「役立てられると思う」という回答であった。講義の内容としては事例を用い、参加者が考えながら参加することで応用行動分析学を初めて学ぶ方々にも分かりやすい内容であったことがうかがえる。また、ABC 分析だけでなくそこから行動の機能を推定するための情報整理の仕方をチャート形式

で示していただいたり、支援を考える際の支援のポイントを示していただいたりと、普段の支援の場面を想定しやすいものとなっていたのではないかと考える。後に示す本セミナーの感想にも、「なぜこのような行動をしてしまうのかが理解できた」という内容のものが複数見受けられた。

（２）グループ協議に関するもの

グループ協議の内容についてのアンケート結果を図 6 に示す。

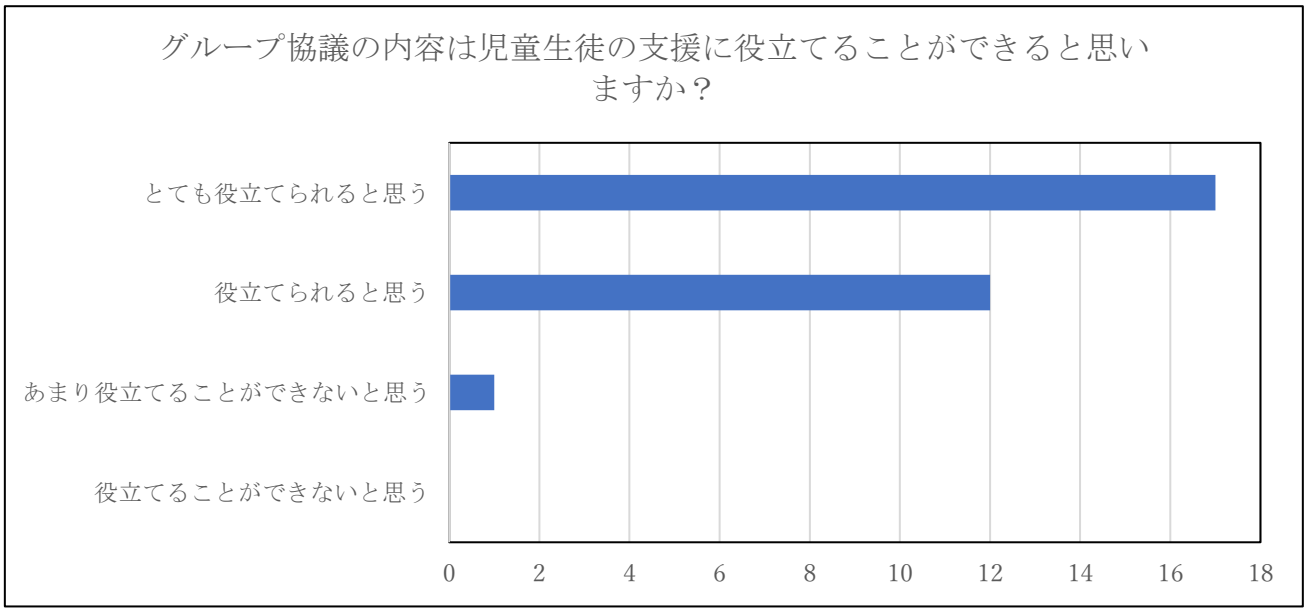


図 6　グループ協議の内容に関する事後アンケートの結果

アンケートを提出いただいた参加者おおよそ全員が「とても役立てられると思う」「役立てられると思う」という回答であった。

参加者アンケートをもとに 4 つの事例を作成し、各グループ内で検討してみたい事例を一つ選んで進めた。事例の内容が普段関わっている児童生徒への支援で困っていることと合致していたり、以前に経験があったり、事例で取り上げた架空の児童生徒の姿が想像しやすいものであったために、今後の支援へ活かすことができるイメージがわきやすかったのではないかと考えられる。

６．今後の課題

（１）会場について

今年度は昨年度までの附属臨床センターでの実施の際に会場が狭く協議の声が聞こえにくいといったことがあったこと、より多くの支援員の方々にご参加いただきたいと考えたことから、人数制限を撤廃し例年の会場である附属臨床研究センターではなく、本校体育館で実施をした。「人数の制限がなくてよかった」「広い場所で多くの支援員さんが参加できて良かった」といったご意見があった一方、「後方に座っていたがスクリーンがぼやけて見にくかった」という意見も何点かあった。来年度以降も参加希望人数によって会場を変更していくことを考えているが、体育館での実施になった場合には、スクリーンを複数準

備する、文字の見やすい明るさにする、講師の先生には資料作成の際に見やすい文字の色を心掛けていただくように事前にお願いするなど参加者がストレスなく参加していただくことができるような運営方法を模索していく必要があると考える。

（２）協議の班分けについて

今回は前回とは違い、様々な方々から色々なご意見をいただくことも参考になるかと考えたこと、普段困り感を抱えていなくても今後様々な児童生徒の支援に当たる可能性があることを考え、グループ協議の際に同じような困り感を抱えた方々を同じグループにまとめるということは行わなかった。そのことについてのご意見はいただかなかったが、グループ協議の様子をみさせていただいた際に、なかなか意見を述べることが難しそうな方がいることがあった。来年度以降、どのような方法がよいのか担当者の中で検討していく必要性を感じた。

来年度も、今年度の振り返りを活かしながら、参加者にとってより有意義なセミナーの開催を目指し、計画・運営を進めていきたい。